

市民社会の文化社会学 : Alexander市民圏論  
の検討を中心に

兼子, 諭 / KANEKO, Satoshi

---

(発行年 / Year)

2018-09-15

(学位授与番号 / Degree Number)

32675乙第237号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2018-09-15

(学位名 / Degree Name)

博士(社会学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021295>

博士学位論文  
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	兼子 諭
学位の種類	博士（社会学）
学位記番号	第 679 号
学位授与の日付	2018 年 9 月 15 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(2)該当者(乙)
論文審査委員	主査 教授 徳安 彰 副査 教授 藤田 真文 副査 教授 佐藤 成基 副査（学外）山梨大学教授 鈴木 健之

市民社会の文化社会学  
—Alexander 市民圏論の検討を中心に—

1. 審査の経緯

本委員会は、2018 年 1 月 16 日の社会学研究科教授会における論文受理の決定を受け、同日発足した。受理小委員会からの修正要求を受けて 2018 年 4 月 14 日に再提出された論文について、査読に基づく意見交換を適宜行った上で、6 月 1 日に小委員会を開催して最終的な意見交換を行い、口述試験の方針を決定した。6 月 8 日に口述試験を行い、同日審査小委員会を開き、論文及び口述試験の結果について検討を加えた。

2. 結論

本委員会は、兼子諭氏の博士学位請求論文を、全員一致で博士学位授与に値するものと判断する。

3. 論文の課題

本論文の課題は、市民社会における集合的な意思や意見の形成や表明、そしてその社会的作用のメカニズムを解明するための「より有効な」社会学的分析モデルを考案することである。

このような課題設定の背景にある認識は、次の通りである。ソ連・東欧の社会主義国の解体をもたらした市民運動、ラテンアメリカでの権威主義体制に抵抗した民主化運動、旧西側諸国で 1970 年代以後に高まった「新しい社会運動」などの趨勢が、市民社会という概念や思想への関心を再び呼び起こし、政治や経済とは異なるもうひとつの社会領域としての市民社会が、社会科学や社会思想の領域において盛んに論じられるようになった。政治

や経済よりもむしろ、市民社会における人々のネットワークや連帯、公共の言論の方が、民主化運動や社会の改革や改良において目覚ましい力を発揮したとみなされ、市民社会概念への関心が高まった。

だが市民社会は、独裁的ないし権威主義的な体制の解体などの革命的場面でのみ作用しているわけではない。むしろ民主的とみなされる近現代社会において、市民社会は市民の集合的意見を形成し、表象する場として日常的に作用し、立法や政府の行政などに影響力を与えている。事実、本論文で取り上げられているのは、アラブの春をもたらしたエジプト革命のような事例だけでなく、むしろアメリカ社会におけるロドニー・キング事件、大統領選挙戦、ウォーターゲート事件、公民権運動などの事例が多い。

こうした市民社会に関わる現象を記述し分析するため、本論文では、アメリカの社会学者であるジェフリー・アレクサンダーの〈文化社会学〉の理論枠組、これを応用したディスコース論やパフォーマンス論、これらのディスコースやパフォーマンスの社会的作用についての観点を組み込んだアレクサンダー版の市民社会論ともいべき「市民圏」論、などが検討されている。

このような作業を経て、本論文では、マクロな国家レベルの社会統合に関わる集合的な意思や意見の形成や表明、またその社会的作用を解明するための社会学的分析モデルとなる〈市民社会の文化社会学〉が提唱されている。またそれによって、市民の間での連帯とコミュニケーションの領域として市民社会を捉え、それが特に政治システムに対して果たす相対的に自律した作用について分析を進めることができるし、また進めるべきであると主張されている。

#### 4. 論文の構成

序論 問題の所在と構成の紹介

- 1 問題の所在
- 2 本稿の構成
- 3 本稿における公共圏、市民圏、市民社会の用法について

1章 Habermas の公共圏論の検討—本稿の問題意識の明示のために—  
はじめに

- 1 Habermas の政治的公共圏と民主的な意見形成・意思決定の関係モデル
- 2 Habermas の討議モデルの問題—認知的次元の優越と手続主義の徹底—
- 3 Habermas の理念的市民像としての「小規模の公衆」
- 4 Habermas の公共圏論の難点と Alexander 市民社会論の概略の提示

2章 Alexander 文化社会学の「基本形態」としての Durkheim 宗教社会学—Durkheim の「宗教“的”社会学」に着目して—  
はじめに

- 1 Durkheim の宗教概念—聖別のシンボリズムとしての宗教—

- 2 「独立変数としての宗教」—Durkheimによる「宗教“的”社会学」の提示—
- 3 信徒にとっての外発的／内発的な行為要因としての宗教
- 4 宗教現象の現在性への着目
- 5 AlexanderによるDurkheim宗教社会学の継承
- 補論 DayanとKatzのメディア・イベント論について
- 3章 Alexander市民圏論の「前身」としてのParsonsの社会的共同体論—「象徴的メディア」としての影響力概念の検討を中心に—
- はじめに
- 1 象徴的メディアとしての影響力
- 2 影響力の流通—政治と社会的共同体の関係—
- 3 影響力の信用創造—影響力の「銀行」としての大学—
- 4 影響力論の到達点が大学論であることの意味—認知的シンボリズムによる社会的共同体の正統化—
- 5 HabermasのParsons社会的共同体論・影響力論
- 6 Parsons=HabermasとAlexanderの分水嶺の明確化
- 4章 Alexanderの〈文化社会学〉の検討—〈市民社会の文化社会学〉の導入として—
- はじめに
- 1 〈文化社会学〉の先駆としてのBellahとGeertz
- 2 「強い」文化理論としての〈文化社会学〉
- 3 「弱い」文化理論への批判とその背景
- 4 Alexander〈文化社会学〉の新たなる段階としての「文化的語用論」
- 5 Alexanderの〈文化社会学〉の理論的特徴、課題、そしてその真価について
- 5章 市民社会のディスコース—市民社会の「言葉」分析—
- はじめに
- 1 二項対立的な象徴コード
- 2 橋梁隠喩
- 3 ディスコースの物語性
- 4 公共圏の分化現象—ディスコースと公共圏と分化の対応性—
- 5 Foucaultの言説分析とAlexanderのディスコース分析の対比
- 6 「市民社会のディスコース」論が浮き彫りにするAlexanderの新たな課題
- 6章 市民社会のパフォーマンス—市民社会の「演劇」分析—
- はじめに
- 1 Alexanderのパフォーマンス論の概説
- 2 パフォーマンスにおける脚本の工夫
- 3 パフォーマンスにおける「演出」の工夫
- 4 パフォーマンスにおける「舞台道具・舞台装置」の工夫

- 5 パフォーマンスにおける「演技」の工夫
  - 6 現代のパフォーマンスの難題—オーディエンスとジャーナリスト・批評家の存在—
  - 7 パフォーマンス論から市民社会を捉えることの意義—Alexander の市民社会像と Habermas (および Parsons) の比較—
- 7章 市民圏の構造とその核心的作動としての「市民性の回復」
- はじめに
- 1 「市民圏」の定義とそのパラドックスの提示
  - 2 市民圏の制度構成要素
  - 3 「市民圏」の社会的作用—「市民性の回復」と「翻訳問題」—
  - 4 公民権運動—「市民圏」論の事例研究—
  - 5 Alexander 公民権運動論の課題
  - 6 Alexander 「市民圏」論のモデル化、及びその意義と課題の明示
- 終章 〈市民社会の文化社会学〉の提唱とその意義について
- 1 〈市民社会の文化社会学〉とは何か—本稿の総括をもとに—
  - 2 〈市民社会の文化社会学〉の意義—市民社会の社会学的解明—

## 5. 論文の内容

序論では、前述のような本論文の問題意識と全体の構成について述べられている。その後、本論文のキー概念である「公共圏」、「市民圏」、「市民社会」という3つの概念の用法を規定した上で、より広義の問題関心が示されている。

1章では、市民の集合的な意思や意見の形成を考察し、さらにはそれを規範化する枠組として、社会哲学や社会思想において現在もっとも有力な手法の一つとされる、ハーバーマスの公共圏論が検討されている。ハーバーマスは、包摂的な「市民的」統合への分析や規範化に取り組んでいるために、市民社会における集合的意見形成や表明に関する社会学、すなわち〈市民社会の社会学〉の代表的な理論家とみなされる。だがその公共圏論は、コミュニケーション的合理性を前提としているために、情緒的次元や文化的次元が看過されることになり、さらに公共圏が小規模化せざるを得ない点が指摘されている。

2章では、アレクサンダーの〈文化社会学〉の「基本形態」として位置づけられる、デュルケムの宗教社会学が検討されている。本章では、デュルケムの宗教社会学がアレクサンダーの〈文化社会学〉の「基本形態」であるということの意味が、①聖別のシンボリズムとしての宗教＝文化という文化概念の規定、②聖別のシンボリズムとしての宗教＝文化の社会的作用への着目、③宗教＝文化現象の有する、行為者への外在的な拘束性と精神の内面的な活性化の二重の作用への認識、④世俗化社会における宗教現象の現在性の強調、などの観点から明らかにされている。

3章では、ハーバーマスに先立つ〈市民社会の社会学〉であると同時に、アレクサンダーの「市民圏」論の「前身」としても位置づけられる、パーソンズの「社会的共同体」論、特にその軸となる「影響力」概念が検討されている。パーソンズは影響力を、社会連帯や善なるものをめぐる説得や合意形成の象徴メディアとして定義する。パーソンズの社会的共同体論・影響力論が〈市民社会の社会学〉であるのは、貨幣や政治権力とは区別される影響力という象徴メディアによって、市民の集合的な意思や意見の形成や表明のメカニズムを説明するからである。また、アレクサンダーの「市民圏」の「前身」であるのは、やはりこの影響力概念を前提にして、アレクサンダーが「市民圏」概念を提示したことによる。

この3章では、権力と影響力の交換を「影響力の社会的流通」の過程として、影響力の合理主義的な拡大を「影響力の信用創造」の過程としてそれぞれ把握し、この2つの過程のメカニズムを解明することによって、民主主義社会における市民の集合的な意思や意見の形成や表明についてのパーソンズの見解が検討されている。そこから、合意形成は感情的な共感によってではなく、認知的で合理的な相互行為によってなされるべきであるという、パーソンズの認知重視の傾向が明らかにされている。

以上の3章までの議論は、アレクサンダーの〈文化社会学〉やその市民社会論である「市民圏」論の導入となるものである。これに対して4章以下では、アレクサンダーの〈文化社会学〉およびその「市民圏」論について考察されている。

4章では、アレクサンダーの〈文化社会学〉が検討されている。アレクサンダーが文化社会学を展開する上で、デュルケムとともに参照しているベラーとギアツに関する議論が考察され、それをふまえてアレクサンダー自身の〈文化社会学〉の理論的特徴が析出されている。その要点は、行為や社会現象に対して文化を独立変数として位置づけるというものである。また〈文化社会学〉の第2段階ともいべきパフォーマンス論が予告的に概説され、パフォーマンスの舞台として市民社会を把握することの社会学的意味について述べられている。

5章と6章では、市民の集合的な意見の形成や表明の2つの具体化としてアレクサンダーが提示する、「市民社会のディスコース」と「社会的なパフォーマンス」について検討されている。アレクサンダーは、市民社会における集合的な意見の形成に内在する文化的次元への配慮をもって、市民的なるものをめぐるディスコースやパフォーマンスについてのモデルを提示する。

5章では、行為をテキストに転換するという解釈学的思考に基づく「市民社会のディスコース」の解釈が考察されている。アレクサンダーは、市民社会における「語り」を「市民社会のディスコース」として捉え、市民にとっての聖と俗、浄と不浄といった二項対立的な文化・価値のコード、その表現のために用いられる隠喩、さらにはそれらによって編成される物語性という3つの観点から、このディスコースを分析する。分析の対象として、マスオーディエンスとしての市民が受容するマスメディアの記事などが設定されている。

6章では、「社会的なパフォーマンス」が検討されている。アレクサンダーは、演劇的な所作や言動を用いた意味構築過程としてパフォーマンスを定義し、このパフォーマンスの舞台として市民社会を捉える。マスオーディエンスとしての市民から支持を大々的に取り付けることに成功する社会的なパフォーマンスは、社会の統合を再認させる儀礼的な効果を生み出し、その結果として、その演者が市民社会の代表的地位に就任することを促したり、その演者が希求する問題状況の解消に助力することを、市民に効果的に訴えることができる。リアルな社会的なパフォーマンスの成功のためには、フィクショナルな演劇的パフォーマンスと同様に、脚本、演出、舞台道具や装置、そして実際の演技などといったパフォーマンス上の創意工夫が必要になる。

7章では、ディスコースやパフォーマンスの社会的作用が生じる空間としてアレクサンダーが提示する「市民圏」論が検討されている。アレクサンダーは「市民圏」を、直接的な面識や交渉のない不特定多数の人々が同じ市民であると自らを感覚的に同定し、互いに想像的な連帯を結ぶための社会領域と定義する（また、その反対に彼は、例えば合理的な利益追求の領域としての経済などのような、市民の連帯の形成に第一義的に関与することのない社会領域を、「非市民圏」として定義している）。アレクサンダーは、このような連帯を具体化する制度として、「コミュニケーションの制度」と「制御の制度」という、市民圏の2つの制度を提示する。

「コミュニケーションの制度」は、市民の集合的な意思や意見としての「世論」を産出する制度である。世論の形成は、市民社会にとって浄か不浄かといった象徴的な二項対立に依存するディスコースとして具体化するから、社会の統合や人々の社会への包摂や排除にかかわる公的なディスコースである。また「コミュニケーションの制度」は、マスメディア、世論調査、市民的アソシエーションの3つからなり、なかでもマスメディアに属するジャーナリストは、経済などの「非市民圏」の問題状況を市民社会に伝達する「斥候兵」と位置づけられている。「制御の制度」は、市民の集合的な意思や意見の社会的作用としての「法」を産出する制度である。法は、合法か非合法の区別にとどまらず、ある対象が市民社会にとって浄か不浄かのいずれであるかを弁別する文化的性格を内包する。また「制御の制度」は、選挙、政党、公職などからなり、なかでも公職は、市民社会がその制御のために国家組織の内部に配置する「前哨基地」と位置づけられている。

加えてアレクサンダーは、「市民圏」の中核的な作動として「市民性の回復」を提唱する。「市民性の回復」とは、「市民圏」の統合性を脅かしかねない「非市民圏」の活動や思想の修正を図る社会過程を指す。このような「市民性の回復」が喚起されるか否かは、「非市民圏」が「市民圏」の統合への脅威として社会的に解釈されるか否かにかかっている。つまり、ある特定のセクターや圏の問題が市民社会全体のものとして「翻訳」されるか否かが「市民性の回復」の可否を左右する。以上のような理論的整理に基づいて、アレクサンダーによるアメリカの公民権運動の分析が詳細に検討されている。

終章では、〈市民社会の文化社会学〉の理論的・概念的な内容とその問題設定などが整理

され、〈市民社会の文化社会学〉の特徴が明らかにされている。〈市民社会の文化社会学〉は、①社会運動などの集合行動は、その訴えが「真正である」ことを市民に納得させるために、どのようなパフォーマンスにおける文化的な創意工夫を施すのか、②このようなパフォーマンスは、「コミュニケーションの制度」を通じて、市民圏にどのように伝播されるのか、③それを受容するマスオーディエンスとしての市民は「コミュニケーションの制度」や「制御の制度」、そして社会運動にどのように反応するのか、④マスオーディエンスとしての市民の反応に触発されることによって「制御の制度」は、何を／どのように国家組織に働きかけるのか、またそれにより、どのようにして非市民圏に介入するのか、などを検討課題とすることになる。

また〈市民社会の文化社会学〉の意義について、次のように述べられている。これまで有力だったパーソンズやハーバーマスの議論は、市民社会のコミュニケーションのアウトプットとしての世論や、その形成にあたっての政治家や社会運動の行為実践を考察するにあたって、そこに内在する象徴的な意味付与という「文化的」次元を第一次的な分析対象とするものとはなっていない。それは、この次元が、市民社会に求められる合理的な認知と討議の対象とはみなされないからである。さらにそれによって、現代の民主主義政治にしばしばみられる劇的スペクタクル化の過程がその射程の中心から遠ざけられている。

これに対して〈市民社会の文化社会学〉は、市民の集合的な意見形成は、直接的な接触の困難なマスとしての市民の存在を指向せざるを得ず、このような市民の関心や共感を惹起するのに付随する表出的・感情的な側面を最重要視しなければならないことを強調する。また、このような理論的思考をもって〈市民社会の文化社会学〉は、市民の集合的な意見形成をめぐるコミュニケーションの有する聖別をめぐる文化実践としての側面を浮上させ、その分析を行う。ポピュリズムや大衆扇動の過程を説得的に説明する分析装置としても適用可能である。

さらに〈市民社会の文化社会学〉の意義として、現代市民社会論における市民社会概念の「残余カテゴリー化」という理論的困難の解消という点が挙げられている。アレクサンダーによれば、現代の代表的な市民社会論者の市民社会概念は、国家の外にある制度に言及する拡散的で包括的な概念規定に後退した。これに対してアレクサンダーは、市民の集合的な意思や意見の形成や表明を、聖と俗、浄と不浄といった象徴的な二項対立的コードを軸とする、一種独特な意味構築の過程として捉える。このような行為論やコミュニケーション論を組み込む「市民圏」論や「市民圏」論の理論構想を基盤とする〈市民社会の文化社会学〉は、現代の市民社会概念の定義という学問的課題に対しても、重要な貢献を果たすといえるのである。

## 6. 論文の評価

### (1) 学術研究・論文としての形式的要件



本論文は、論述の形式、注の示し方、文献リストの表示など、学術論文として必要な形式的要件を満たしていると判断される。本論文の主題である〈市民社会の文化社会学〉に関連して、現代アメリカ社会学における文化社会学的研究のリーダーであるジェフリー・アレクサンダーの諸著作が詳細に検討され、関連する論者の諸著作への目配りも適切である。また〈市民社会の文化社会学〉を提唱する著者自身の理論的立場も、明確に示されている。

## (2) 達成と貢献

本論文の貢献として評価されるべき点は、以下の3点である。

第一に、本論文では、この20年以上にわたってアメリカ・イェール大学でアレクサンダーを中心に展開されてきた文化社会学の要点が、市民社会論（アレクサンダーの用語では「市民圏」論）の文脈の中できわめて明確に整理されている。アメリカ社会学の理論的動向について、日本では、1990年代までのネオ機能主義やマイクロ・マクロ・リンクの議論は比較的広く知られているが、その後の展開については、一部の研究者を除いてあまり知られていない。アレクサンダーのいう「文化社会学」は、文化現象の社会学的分析というより、社会現象における文化的要素の分析であり、しかもそれを公共圏論や市民社会論と結びつけて議論している点に特色がある。本論文は、文化社会学の展開に関して、現時点で日本において最も包括的な議論といえる。まずはその点を評価することができる。

第二に、しかしながら本論文は、アレクサンダー理論の新展開の祖述ではない。むしろ著者が言う〈市民社会の文化社会学〉という研究課題にむけた理論枠組の構築こそが主題である。本論文では、従来の市民社会における公共圏の議論において、パーソンズやハーバーマスが合理的、認知的側面に偏重した議論を行ってきたのに対して、アレクサンダーの議論が、マスオーディエンスを前提とした現代社会における合意形成における、文化的、情緒的側面を重視している点を明確に指摘している。本論文は、従来の公共圏論や市民社会論における「合理化」という暗黙の前提を明るみに出すことによって、公共圏論や市民社会論の新たな展開の可能性を引き出していると評価することができる。

第三に、本論文では、アレクサンダーの文化社会学や市民圏論の理論的エッセンスだけを抽象するのではなく、具体的事例への適応をふくめた検討が行われている。海外の先端的理論を研究対象とする場合、しばしば理論的な部分だけが切り取られ、抽象化されたかたちで紹介されることが多いが、それではもともと理論が形成された社会の文脈と理論の関係が見えなくなるだけでなく、しばしば不毛な概念的論争に終始することも多い。本論文では、ウォーターゲート事件や公民権運動といったアメリカ社会の具体的な事例の分析もふくめて理論的概念を検討することによって、理論の現実的な分析力についての考察も行われている。著者の今後の研究の展開を考えた場合、アレクサンダーらが扱っていない新しい事例、たとえば日本社会への適用は一つの有望な研究領域になりうる。本論文は、その十分な準備作業になりえていると評価することができる。

### (3) 問題点と残された課題

本論文は、理論・学説研究として充実した内容を有しており、著者自身の理論展開の方向性も明示されているが、なおいくつかの点で課題を残している。

第一は、理論的アプローチの一面性の問題である。著者の言う〈市民社会の文化社会学〉において、アレクサンダーに依拠して市民社会におけるコミュニケーションの文化的、情緒的側面を重視することは、パーソンズやハーバーマスへのアンチテーゼとしては一定の有用性があるかもしれないが、「文化社会学」と銘打つことによって、逆に文化的、情緒的側面を一面的に偏重することになり、現象の多次元性への視点を損なうことにはならないだろうか。もとより全方位的な万能理論はありえないが、単純化がいきすぎると理論の分析力が損なわれる。今後の理論展開において、ある種のバランスが望まれる点である。

第二は、著者の言う〈市民社会の文化社会学〉が分析理論なのか、規範理論なのかという志向性である。ハーバーマスの公共圏論が規範理論であることはしばしば指摘されるが、アレクサンダーの文化社会学はどうか。またそれに準拠しながら自前の理論を構想する著者自身はどうか。アレクサンダーの議論は、客観的で経験的な分析を進めているように見えるが、その根底には、アメリカ民主主義に対する強い信頼がうかがえる。その意味で、かつてパーソンズがアメリカ社会について論じたのと同じように、アメリカ的な価値に根差した規範理論としての性格があるのではないか。またアレクサンダーの理論がどうであれ、著者自身の志向性も、あらためて問われることになるだろう。

第三に、この問題は、〈市民社会の文化社会学〉を、たとえば日本のような非西洋社会に適用する経験的研究の可能性とも関わってくる。そもそも市民社会や民主主義という概念そのものが輸入品である多くの非西洋社会について、アレクサンダー流の理論枠組による分析は成り立つのだろうか。アレクサンダーらが行ったエジプト革命の分析そのものも、単純に非西洋社会への適用の成功例とみなすのではなく、輸入品の概念がどのように作用したのかという観点から問い直す必要があるのではないか。著者が今後、事例の経験的研究に取り組む場合には、この点に留意しなければならないだろう。

口述試験では、以上のような点について活発な質疑・討論がなされた。著者は指摘された問題を明確に認識して、自らの課題として引き受けようとしており、すでにいくつか具体的な研究の方向性も示してみせた。今後、理論と実証の両面から、〈市民社会の文化社会学〉の内容を充実、発展させていく研究に取り組んでいくことが期待される。

口述試験の結果もふくめて、審査小委員会は、本論文が明確な問題意識をもって、アレクサンダーの文化社会学と市民圏論に依拠しながら、自らの〈市民社会の文化社会学〉を展開するために、いくつかの重要な理論的知見を打ち出し、今後の方向性を展望していることを確認し、博士号の授与にふさわしいものと判断した。

以上